

音楽を楽しむ子どもたちを育むための 音楽指導のあり方

～歌わない学校から少人数でも大きな声で歌う学校を目指して～

中野市立科野小学校 松村貴子

目次

1. 研究の主旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 1
2. 研究の経過と内容・・・・・・・・・・・・・・・・ P 1～P 5
3. 今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 6

1. 研究の主旨

現在在職している科野小学校は、全校児童51名の小規模校で、高社山麓にある自然豊かな学校である。縦割り班活動が学校教育活動の中で位置付き、清掃や遊びなど全校で取り組んでいる。

専科3校目で、最初に挨拶に行った時に一番印象に残ったことは、「歌わない学校です。」の一言だった。始業式、全校72名の前に立つと全員の視線が集まらなかった。学級ではのびのびと歌えても全校が集まる音楽集会では周囲を気にして歌えない子が多かった。高学年の歌声は小さく、一部の学年に支えられた全校合唱で子どもたちは暗い表情だった。授業が成立しない学級もあった。6年生と初めて歌った「つばさをください」は、歌っていくうちに徐々に替え歌の方が大きくなって授業にならない状態だった。これが私の第一印象だった。その時から音楽を通して、まずは、当たり前のことを当たり前出来る子どもたちを増やしていこうと決心してスタートをきった。

2. 研究の経過と内容

(1) 音楽集会での取り組み

①1年目の取り組み

《実態》

前に立っている人の話を集中して聞くことができない子が多かった。指揮をしても視線が集まらないし、当然声もまとまらない。音楽会前に講師の先生をお呼びして指導を仰ぐ機会があったが、ほとんど楽曲指導ではなく、正しい姿勢・集中力をつける練習で終わってしまった。合唱、合奏する以前の課題が大きかったからだ。

《全員でできた達成感を味わせたい》

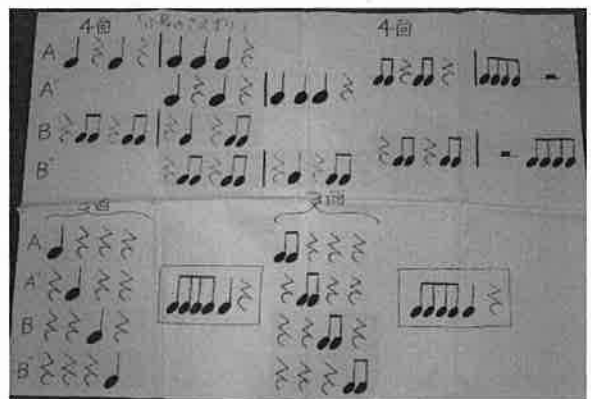
クラッピングを取り入れ集中力を持続させること、リズム譜の読譜力をつけること、全員でできた達成感を味わせることを目標に取り組んだ。教育音楽の冊子で紹介されていた「小鳥のさえずり」と「祭りだわっしょい！」を選んだ。全校で取り組むので、拡大楽譜を作り、同じリズムパターンを同じ色で分けたり、何回繰り返すかわかりやすく掲示してみた。「タン」や「タタ」というように音符で学習しない1年生はまず四分音符、八分音符、四分休符、八分休符の読み方から始めた。「タン」を「四分音符」に読み換えても1年生はあっという間に覚えていった。

《リズムを合わせるために決めたルール》

最初は全校のリズムが合わなかった。そこで、間違えてしまっても決して責めないルールを決めた。最初は、わざと間違えて見せる子がいたり、なかなかうまくできなくて雰囲気が悪くなっていくこともあった。「しっかりやって！」と子どもたちの中からも真剣な思いも出てきた。成功させたいけれど、長く集中することができない、リズムが読めなくて分からなくなってしまいう子がいる。全て耳で覚えて、読譜する必要を感じていない子もいる。

《リズムパターンの活用》

リズムが読めないから聴いて覚えるという状態では、複数のパートに分かれてリズムが聞こえてくると混乱して分からなくなる。一人一人が自分の力でリズムを読



めるようになること、目で追えることが大事だと考え、リズムパターンをわかりやすく区切ったり色を分けたりした見てわかりやすい掲示に作り替えた。同じリズムパターンが何回続いているか、リズムに言葉をあてはめて唱えながら打てるようにした。自分で読めそうだ、できそうだという見通しを持たせることも大切だ。どうやって簡単そうに見せるか。なんだ簡単だ！これならできる！と子どもが思えば怖いものはない。何回か合わせているうちにとうとう72人がピタッと合って、「気持ちいい！」が味わえた。比較的簡単に達成感が味わえるのもクラッピングのよさだと強く感じた。少人数だからこそ学級でやったときよりも、全校でやったときの迫力の違いやよさをより体感できた。

②歌を身近なものにするために

《毎日学級から歌声が響く環境整備をする》

本校に来てから4年が経ち、今は朝の活動が終わると、いろいろな教室から歌声が聴こえてくる。音楽集会は隔週、月2回のペースで入れてもらい、行事に関係なく歌声がとぎれないように取り組んでいる。「たのしいうた」の歌集に準じたCDを作って各学級に配布し、教科書の指導用CDも教室に備えてある。2年前から各教室のプロジェクターで歌詞を投影させながら同時に音源も流せる設備が整い、音楽集会で歌う曲や音楽会、入学式、卒業式、運動会の歌などサーバーに入れ、教室で活用できるようにしている。

(2) 合唱団での取り組み

①子どもが主体的に参加できる合唱団づくり

《6年生がお手本になるように位置付ける》

合唱団の半数が6年生だったが、重い雰囲気だった。それまで前任の先生と積み重ねてきた子どもたちからすれば、初めての合唱団指導で手探りで始めた私の様子に不安や戸惑いの目で見ているのかもしれない。練習時間が始まってもし示しないといつまでも始まらないし、並ぶように指示してもなかなか動かない。合唱団に来て学年でかたまっで並んで、一番下の3年生が不安そうに元気がなく歌っていた。どうしたらやらされている活動ではなく、子どもたちが主体的に参加できる合唱団になるのだろうか。6年生をリーダーとして位置付けば自然と下の学年はついてくるのではと考え、まず団長と副団長に練習の終わりのあいさつを歌声でやってもらった。最初はぎこちなく恥ずかしそうだったが、徐々に堂々とできるようになった。1年目が過ぎると自然と引き継がれ、団長・副団長が交代で行った。この年の団長も副団長も最初は緊張して声が裏返ったり、小さかったが、一生懸命やっていくうちに、どんどんいい声になっていった。また発表の機会がある時には、みんなを代表して一言発表してもらった。このようながんばる6年生の姿は子どもたちのお手本や目標になり、私(教師)が言うよりも説得力があった。そのうちに、あいさつは団長が指名して、全員がやるようになると、全員のいい声を共有することができ、一人一人の自信にもつながっていった。最初の頃は、私が褒めているだけだったが、次第に子どもたち同士で「すごいね。」「いい声だね。」と認めあう姿も見られるようになった。

②誰もが安心して声を出せる人間関係づくり

《学年の枠を越えた声がけから》

学年でかたまっで並ぶことが多く、他の子の歌う様子を気にしながら歌う姿も多かった。そこで、「同じ学年で並ばない」ことを提案し、特に6年生から下の学年の間に入ってもらった。特定の子とは関わられるけど、一緒に歌っていてもうち解けない雰囲気の中では一体感が生まれてこない。いつまでも遠慮し

ていて自分を出せない。誰もが安心して歌える関係が必要だった。いろんな学年の人と関わってほしい、学年関係なく仲良くしようなど粘り強く声をかけていくうちに、6年生が自分から率先して下の学年の間に入ったり、下の子に立つ場所を教えてくれるようになっていった。その姿を見て、次の学年は私が何も言わなくても自分たちから進んで声をかけ合ったり、下の学年の子たちをリードしたりするなど、自分たちで考えて動くことができるようになっていった。些細なことだが、下の学年の子が困っていると自分から声をかけたり、西日が当たってまぶしそうだからカーテンを引く、練習のために机椅子を移動させるなど言われなくても自分で考えて行動できる姿が見られるようになった。

③大きな声で歌う気持ちよさを実感させたい

《選曲の工夫》

選曲の際には、セリフや音程がつかない歌詞も入っている曲を選ぶように心がけた。というと聞こえがいいが、実際はきれいなハーモニーづくりにはまだまだハードルが高かったため、簡単な2部合唱で聴き映えがよく、元気に声が出せる曲を探した結果だった。普段の声が小さければ、どんなに歌声を大きくしようとしても無理なのではないかと考えた。大きな声を出す気持ちよさを感じさせたいと思い、選曲から考えてみた。

まず「星の大地に」という曲を選んだ。この曲の最後には「ヤッ！」というかけ声が入る。初めて最後まで歌った時、1回目は無言。2回目数人のか細い声。さらに声を出しやすくするために、アクションをつけて片足を前に踏み込んで片手を上に突き上げるポーズをつけた。ところが、その手がまたなかなかまっすぐに上がらない。たった一言の「ヤッ！」をやるだけなのに、誰かがやってくれたらできるんだけど、みんなそんなふうに思っていた。だから何回やっても変わらない。こうなったら、もう歌の指導ではなくなっていた。どこかの体育会系集団、もしくは応援練習の雰囲気になってきた。出来るまでやるとこちらも本気で宣言して大声でやってみせる。すると、ようやく子どもたちも意地になって声を出してきた。私に負けじと夢中になって叫ぶように言えたとき、子どもたちの表情は笑顔になった。思い切りやったら気持ちがいい。音楽会の発表を経て、足をダンと踏み出すアクションをおこさなくても声だけで表現できるようになっていった。

「ゲンキをあげる」は「あげる」にちなんで「天ぷらをあげる」の「ジュワ」、「花火を打ち上げる」の「ドドン」スピード感をもって、がむしゃらに全身で声を出す経験をする。すると自然に息を一瞬で深く吸って吐き出すことができるようになり、身体を使った発声になった。それと同時に、声を出すことに抵抗がなくなり、安心して歌える集団になった。また、元気でノリがよくてかっこいい、子どもたちが共感できるわかりやすい歌詞のものを選ぶように心がけている。また、頭声でないと歌えない音域の曲も効果的だった。高音域を鍛えることで、自然と地声が減った。

④同僚の先生への協力を求める

《I先生とY先生》

一緒に指導してくださったI先生とY先生がいた。先生方は、それぞれの視点で子どもたちにアプローチしていただいた。その影響は大きく、私自身たいへん勉強になっている。

I先生は、子どもたちにわかりやすい言葉で、気持ちを代弁しながら子どもたちのやる気を引き出してくださいました。子どもたちが「合唱団練習あるの？嫌だなあ。」と弱音を吐くと、「そんなふうにするのは格好悪いよね。せっかく自分からやろうと決めて始めたんだよ。がんばっているのに、もったいないよね。」と怒るわけでもなく穏やかに諭すように話してくださった後、それ以来子どもたちが弱音をあまり

言わなくなった。

Y先生は経験豊かな男性の先生で、声の出し方のイメージを持たせて楽しく子どもたちの力を引き出してくれる。その気にさせ、のせるのが本当に上手で、いつの間にか子どもたちが夢中になっていく。Y先生がバリトンの迫力のある声で歌ってみせると、それに負けじと子どもたちも声を出していく。Y先生の指揮に安心して子どもたちが歌っている様子が、伴奏している私にもしっかり伝わってくる。

また、本校の先生方の理解にも支えられている。発表の折には、地域の方や他校の先生方がよかったと話してくれていたと必ず子どもたちに返して下さることが、子どもたちの自信につながっている。校長先生はじめ、どの先生もが練習中に子どもたちの輪に入って一緒に歌ってくださったり、見守ってくださっていることが本当にありがたい。

(3) 音楽会での取り組み

《選曲は学級の雰囲気的大事》

職場によっていろいろな経過を経てつくられた「形」がある。でも、目の前の子どもたちは刻々と変化し、私自身の力も得意不得意がある。全く同じことの踏襲は意味がない。それぞれの持ち味を出して、互いに力を発揮し合っている音楽が生まれる。子どもが向いている方向と逆のことをやってもだめだし、難しすぎても簡単すぎてもだめだ。専科を始めたばかりは、選曲の基準が自分の中にしっかりとしたものがあった。学級の雰囲気、好みに合っていて、仕上がりに無理なく限られた時間の中で十分完成できる楽曲や楽譜を選ぶようになった。

《中野市ゆかりの歌を取り入れる》

本校は中野市にあるため、中野市ゆかりの作詞・作曲家の作品を歌い、子どもたちがふるさと出身の偉人、高野辰之さんや中山平平さんや久石譲さんなどに思いを寄せてほしいと思っている。

また、1学級3～13人と少人数のため、教科書に記載されている楽曲を十分に学習体験させられないことも多い。そこで、全校で発表曲として取り組むことで、ダイナミックな演奏を経験し無理なくまんべんなく教科書課題を履修できるように計画している。

《合唱団に活躍してもらおう》

合唱団の力を借りて、歌声のお手本になって全校の前に立って歌ってもらったり、難しい旋律や低音パートをフォローしてもらって全校が気持ちよく歌える合唱作りが可能になってきた。

《同じ合唱曲を継続して歌う》

全校で歌う2部合唱、3部合唱の曲目は、特別時間割があっても十分に仕上げるのは難しい。子どもたちが覚えなくてはいけない曲数も多く、毎年オープニングとエンディングの曲を新しく変えると負担も大きくなるので、思い切って据え置きにして毎年同じ曲を歌うようにした。すると、違うパートの旋律を歌うとしても、十分聴き慣れた曲なので、年を追うごとにしっかりとしたハーモニーが短時間で作り上げることができるようになった。歌詞を覚えるのに精一杯の合唱から脱却でき、子どもたちも自信を持って歌えている。

《合奏は実態に合わせて手作りしていく》

合奏作りは、どの学級もそのままの楽譜でできないことが多い。市販の楽譜で指定されている人数が足りないので、どの楽器で編成していくか考えるところから始める。高学年の合奏では、打楽器に何人も割り当てられないので、一人二役、三役は当たり前。今年、2年生3人の合奏は大変悩んだ。まず、出来

上がりの楽曲は無理なので、オリジナルでやっていくことにした。曲が決まったら、まず旋律のみ作って模造紙に書く。次に、ベースを担当する子と相談しながら、旋律に合う和声から音やリズムを選んで作っていく。基本一人1パートだ。2年生3人だけでも十分合奏になったが、本格的な合奏にするために学級担任と校長先生の助けを借りて、計6人で発表した。最初から楽譜があるのではなく、楽譜を子どもたちと作りながら出来上がった作品だ。

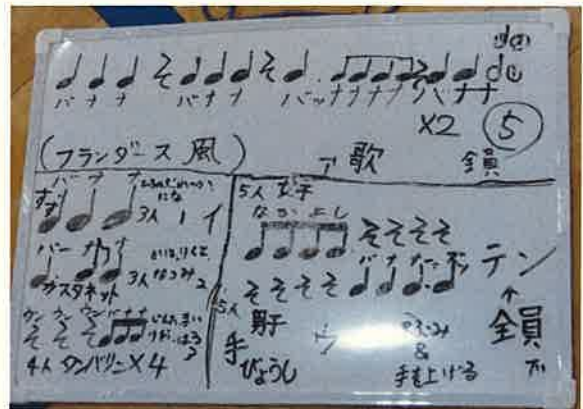
《縦割りソングづくりに挑戦する》

今年度、全校演奏で「絆」を合唱することに決まっていた。縦割り班らしい取り組み、ステージにできないだろうかと考え、思い切って「たてわりソング」づくりを計画した。縦割り班には、班名がある。それぞれの班で考え合って、班の雰囲気や思いを込めてネーミングする。1年目は、せっかく班の名前をつけても子どもたちにそれほど定着せず、ほとんど名前を覚えられていない状態だった。そこで、保護者や地域の方にも縦割り班と一緒に活動しているメンバーや班の名前を知ってもらおうと、縦割り班の名前をモチーフにして紹介ソングを創作して発表することを考えた。

- | | |
|----|------------------------------|
| 1班 | 『スーパートリプル ^{ワン} 1』 |
| 2班 | 『きずな深め隊』 |
| 3班 | 『サンフラワー』 |
| 4班 | 『ラッキーイレブン』 |
| 5班 | 『なかよしバナナーズ ^{テン} 10』 |



縦割り班の名前を使って、リズムや音、旋律をつけて表現するなど、いくつかの方法例と手順を確認したら、各班ごとに創作活動を始めた。つくりたい形や使いたい言葉を決め、6年生の授業である程度形にしていって。その後の数回の練習で、合わせ方や強弱、速度などの工夫をつけて完成した。できた作品は、どれも私の想像を超えるものばかりだった。成功した要因はいくつかあると思うが、一つ目は創作活動を受け入れて子どもたちと一緒に取り組んでくださった本校の先生方の協力である。全く手探りの新しい活動だったので、不安や戸惑いもあったと思うが、反対の声は聞かれなかった。5つの班を私一人では一度に見ることができない。先生方の協力がなければ完成しなかったのは言うまでもない。



《6年生の力を発揮させる》

二つ目は、6年生の創作力だ。日頃からグループ活動ができる子どもたちだったので、「たてわりソング=紹介ソング」を完成させるために、みんなの意見を聞いてまとめていった。自由な発想で常に音楽づくりをしてきた6年生だったので、個性豊かな作品が出来上がった。

《4年間の集大成》

三つ目に、これまでの4年間で音楽の授業や音楽集会、常時活動で行ってきたことが子どもたちの中に積み重なっていたことだ。子どもたちは経験して学習したことを手がかりにして制作した。拠り所になる選択肢がなければ、いろいろなアイデアは生み出すことはできなかったと思う。



3. 今後の課題

当たり前のことを当たり前でできる子を、音楽を通して増やしていこうという思いでこの5年間を振り返ると、この5年間で72人の小さな歌声から51人の大きな歌声に変わっていったことがうれしい。音楽集会で合唱はもちろんのこと、手遊びうた、全校合奏、クラッピングなどいろいろな音楽活動を全校で楽しめるようになった。私自身も心から楽しめる音楽集会、全校合唱になったし、子どもたちも歌声に自信を持てるようになった。学級内で音楽表現をする時に、誰でも安心して歌えるように、決して笑わない、馬鹿にしない、発表したら拍手するなど、心地よい温かい学習環境づくりを目指してきた。安心して取り組めるようになって、初めて一緒に学び合える集団になるのだと思う。さまざまなアプローチを経て、子どもたちの関係が少しずつ変わっていった。今回、私自身が今まで取り組んできたことを改めて振り返ってみて、支えてくれていた多くのことに気づかされた。少人数で全校が集まっても2学級分の人数なので、今まで随分と自由に音楽活動をさせていただいた。いつも新しい取り組みを受け入れ見守って、協力してくださる同僚の先生方に感謝している。先生たちが音楽を楽しむ姿を子どもたちに見せるのも、とても大きな意味があると思う。先生方の演奏によるミニコンサートもその一つだ。音楽の素晴らしさを身近な形で子どもたちに届けてあげることが、雄弁に語るよりも心にきくと届くから。

歌える学校、合唱団になった次の目標は何か。子どもたち一人一人が自分の力で立てているのだろうか。今の環境だからできるけど、変わってしまったら……。それは、私自身の課題でもある。今の学校だから通用するけど、学校が変われば、支えてくれている先生方がいなくなったら今の状態が壊れてしまわないか。私に足りない部分をさりげなく補ってくれている人がいることを自覚し、この学校で先生方とつくってきた経験を自分の確かな力にしていきたい。

今年度、初めて閉校を経験する。開校146年の歴史ある大切な学校を閉じるにあたり、音楽科の役割は何か。これから統合を迎える子どもたちが、自分で考え自信を持って行動できるように、音楽でつけられる力は何か。統合を一つの目標に、「思い」や「願い」を形にしていける役割を担えるように実践を重ねていきたい。